令和元年東日本台風
足利市の記録

〔令和元年台風第 19 号 災害記録誌〕

足 利 市

表紙裏　ページ送り

はじめに

令和元年（２０１９年）１０月１２日　土曜日　１９時００分前、伊豆半島に上陸した台風第１９号は、関東甲信越・東北地方に甚大な被害をもたらし、気象庁により「令和元年東日本台風（以下「東日本台風」といいます。）」と命名されました。

この災害で犠牲になられた方とご遺族に対し、心からお悔やみ申し上げますとともに、被災された方々に対しまして、心からお見舞い申し上げます。

東日本大震災を上回る過去最多の自治体で災害救助法が適用されたこの記録的な災害では、本市に大雨特別警報が発表され、２４時間の降水量としては１９７６年の統計開始以来最大となる２５３ｍｍの大雨をもたらし、昭和２２（１９４７）年のカスリーン台風以来の大災害となりました。

市では、近年経験のない大規模な災害が予想されたことから、前日から対策を協議し、１０月１２日９時００分に災害対策本部を設置しました。その後、市民の皆様に対する避難情報の発令及び指定避難所等の開設、国県の関係機関や市消防団等と連携した被害状況の確認、救助活動に加え、河川からの浸水防止や排水対応など、市民の生命・財産を守るための活動に尽力いたしました。

しかしながら、市内各所で浸水害や土砂災害などが発生し、尊い人命が失われたほか、多くの市民が住宅をはじめとする財産に被害を受け、台風通過後も被災した家財の片づけなどの対応や生活の再建に追われるなど、その被害が深刻なものとなってしまったことは痛恨の極みであります。

以来、市では、全庁をあげて復旧復興活動にあたるとともに、この災害を重大な教訓とした取組を継続しています。

いつ再び起きるかわからない未曾有の災害から市民の皆様の生命・財産を守るためには、河川改修等のハード整備はもとより、「空振り」を恐れず可能な限り明るい時間帯に避難情報を発令すること、発令された避難情報がより確実に市民の皆様に届くような仕組みを構築すること、市民の皆様が日頃から地域の危険箇所を把握し、自らの判断により避難行動をとれるよう日頃から防災意識を高めていくことなど、市民の皆様のご理解・ご協力をいただきながら取り組んでいくべき課題が山積しています。

また、何より、この災害の記録を後世に引き継ぎ、災害の教訓を忘れないようにする必要があることから、この災害記録誌を発行するものです。

本記録誌を発行するにあたり、多くの方々から体験談をお伺いしました。その中で、災害により作業場や農機具などを失いながらも、家族や仲間、ボランティア、関係者に支えられながら、その再建に立ち向かう稲岡町の嶋田様の体験談は、災害の恐怖や被害に遭われた悲しみとともに、復興への思いが伝わってくるものでありましたので、次頁にご紹介いたします。

現在においても、多くの皆様が未だ復興の途上であり、被災された悲しみの中にあることを市職員全員が胸に刻み、引き続き、市民の皆様の安全・安心の向上のために努めてまいります。

令和３年１月

足利市

令和元年東日本台風体験談

災害記録誌を発行するにあたり、多くの市民の方々から体験談をお伺いしました。体験談を頂戴しましたすべての方に御礼を申し上げます。
その中で、水害で作業場や農機具などを失いながらも、家族や仲間、ボランティア、関係者に支えられながら、その再建に立ち向かう稲岡町のいちご農家 嶋田様の体験談をご紹介いたします。

台風第１９号の被害を振り返って

令和元年１０月１２日、台風第１９号の大雨により旗川が増水し、越水した水が稲岡町地内に流れ込み、いちご栽培用のハウス５０ａが倒壊し、収穫を控えたいちごが全て収穫できなくなってしまいました。農機具も殆どのものが水に浸ってしまい、使い物にならなくなり、作業場も車も、みんな泥水に浸かってしまいました。こんなことになるなんて、想像したこともありませんでした。近年、各地で起きている自然災害の報道を見ても、他人事の様で、ハザードマップが真っ白なこの地域においては、大丈夫だという安心感しかありませんでした。

あの日は土曜日で、朝から雨が降っていました。午後になると雨や風が強くなり、とても心配でした。ハウスへ何度も行って、風への備えや、大雨への対応など大丈夫か確認し、何事も無く過ぎ去ってくれるのを待っていました。

夕方になって、雨も少し弱くなってきたので、一安心して家族で夕飯を食べ、テレビを見ていたら、裏の家のご主人から電話があり、「家の前を水が流れている」とのことでした。慌てて外へ出ようとしたら、自宅の庭にも水が流れていました。一瞬何が起きているのか理解できませんでした。

道路に出て、一面を見渡すと、川の中に立っているようでした。膝の上までだった水位もだんだんと上昇し、暗くて状況を確認することはできませんでしたが、「これはもう駄目だ」と直感しました。

家も心配だったので戻ってみると、玄関にも水が入って来ていました。このままでは命の危険もあるので、消防へ連絡しましたが、大混乱しているようで、二階への避難を指示され、家族全員二階で時が経つのを待ちました。

窓から外を見ると、水が川のように庭を流れ、ドラム缶や漂流物が濁流とともに流れて行くのが見えました。停めてあった車も水の勢いで移動していました。

何時だったか覚えていませんが、台風が過ぎ去り月が出ていました。月明かりに浮かび上がるその光景は、今も忘れることはできません。

夜が明け、被害の全容が見えてきました。パイプハウスは全壊して、殆ど原形を留めず、流れ込んだ土砂が潰れたハウスの上や、中のいちごの株の上に堆積していました。鉄骨ハウスも柱が曲がり、ハウス全体が変形し、使い物にならない状態でした。中には土砂が堆積し、水流でえぐられた所や、サッシのガラスが飛び散っている場所もあり、悲惨な状態でした。今年のいちご栽培は諦めるしかないと直感しました。

そんなことを思いながら自宅に戻ってみると、農機具も車も水に浸かり、使い物にならない状態でした。作業場も保冷庫も土砂が堆積し、全て同様です。

数日経ち、農業の継続を諦めるしかないと考えていたときに、妻と娘から、「また、いちごを作るんでしょ」と言われました。その一言がとても大きな力となり、再建を決意させてくれました。

農業関係の仲間、市役所の職員の方々、そして社協のボランティアの方々など、多くの方々の力を借りて後片付けをすることができました。

年が明け、ハウスの再建、作業場・倉庫の再建、農機具の取得などを進めるにあたり、様々な申請手続きではとても苦労しました。

三月に入り、いちごの育苗ハウスでの親株の植え付けをし、やっといちごの作業が始まりました。

台風の被害から一年が過ぎました。昨シーズンはいちご栽培から離れていただけに、今、こうしていちごを栽培できる喜びは何事にも代えることのできないものです。そして、お手伝いをしてくださった多くの皆様にとても感謝しています。

令和２年１２月

嶋田 雅幸（足利市稲岡町在住）

〔記録写真〕

雨は、10 月 11 日午後から降り始め、12 日 20 時頃をピークに大雨が降り続いた。

東分署における土のう積み

ボートによる救助

第三中付近の道路冠水

渡良瀬川中橋付近の増水

10 月 13 日の市内の様子、多くの住宅や自動車が被害にあった。
大規模な水害となった毛野・富田地区

老人保健施設内の浸水

自衛隊による要救助者の搬送

川崎町付近の大規模冠水

水没した自動車を確認する消防隊員

奥戸町　出流川の破堤箇所

市内の至る所で、大雨や河川増水に伴う被害が散見された。

小俣町　春日橋付近の護岸洗堀

毛野東部工業団地、東分署の冠水

毛野東部工業団地

奥戸町　出流川の破堤仮復旧

10月13日12時49分　奥戸町　尾名川水門

助戸大橋町　土砂災害現場

本城一　土砂災害現場

稲岡町　農業用水路破損

松田町　土砂災害現場

災害廃棄物　一次仮置場

災害廃棄物　二次仮置場

災害廃棄物　二次仮置場